

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

日本皮膚病理組織学会会誌 (2007.12) 23巻1号:10～13.

外陰部に生じたSebaceous Carcinomaの1例

堀仁子, 金田和宏, 小松成綱, 佐藤恵美, 山本明美, 飯塚
—

3. 外陰部に生じたSebaceous Carcinomaの1例

A Case of Sebaceous Carcinoma on the Labia Major.

旭川医科大学皮膚科学教室

堀 仁子、金田和宏、小松成綱、
佐藤恵美、山本明美、飯塚 一

key words:sebaceous carcinoma, labia major, clear cell, basophilic cell

症例：76歳、女性

初診：2007年2月26日

主訴：外陰部の紅色結節。

現病歴：初診の約半年前から外陰部に紅色結節が出現し、徐々に増大してきたため、当科を受診した。

既往歴：1963年に子宮頸癌のため広汎子宮全摘術および放射線治療を施行。

家族歴：特記すべきことなし。

現症：左大陰唇外側に2×1.5×0.8cm大の表面は一部びらんを伴い、びらん部は表面粗造で黄色調、易出血性の弾性硬の結節をみる(Fig.1)。その辺縁は表面平滑、淡紅色から正常皮膚色で下床とは可動性があった。

臨床検査成績：末血、生化に問題なく、腫瘍マーカーSCC 2.6 ng/ml(基準値 0~1.5)とCEA12.0 ng/ml(基準値 0~5.0)が高値。画像検査では転移を示唆する所見はなかった。

臨床像および既往歴、SCC高値から子宮頸癌の皮膚転移を考え生検した。

病理組織学的所見(生検)：表皮は欠損しており、腫瘍細胞が真皮内に結節状に周囲の間質との間に裂隙を形成し、増生している(Fig.2)。腫瘍細胞は細胞の中心に核があり、明るい泡沫状の胞体からなる細胞と、好塩基性の細胞の2種類で構成されている(Fig.3)。核異型も認めた(Fig.4)。

免疫組織学的所見：CEA一部陽性,EMA陽性,GCDFP15陰性。Human milk fat globules(HMFG)-2一部陽性。PAS染色は陰性、Oil red Oによる脂肪染色陽性、D2-40は腫瘍細胞陰性であった。

診断：H-E染色で成熟脂腺に近い分化を示す細胞があったこと、脂肪染色が陽性であったこと、EMA,HMFG-2が陽性であったことから本症例を脂腺癌と診断した。



Fig.1

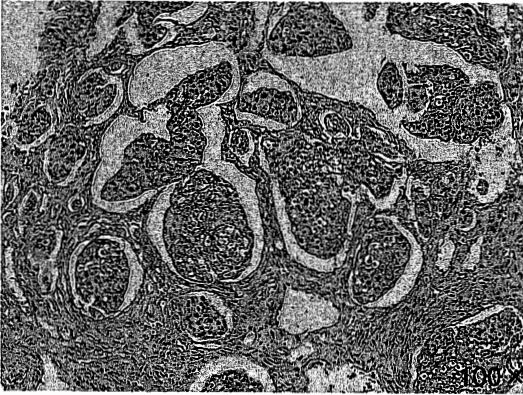


Fig.2

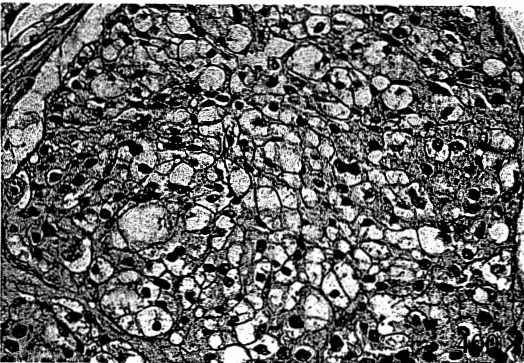


Fig.3

治療および経過：腫瘍辺縁から1 cm 離し、脂肪層下層で切除した。術後約半年経過しているが、現在まで再発転移の所見はない。

全摘標本の病理組織学的所見：全体像を示す(Fig.5)。一部に毛包漏斗部との連続を認めた(Fig.6)。腫瘍周囲に radiation dermatitis の像はみられなかった。腫瘍細胞の形態は生検時と同様であった。

考察：脂腺癌は Meibom 腺や Zeis 腺から生じる眼瞼脂腺癌とそれ以外に生じる眼瞼外脂腺癌とに分類されている。眼瞼外脂腺癌は高齢者の頭部、顔面の露光部に生じることが多く、外陰部の発生は7%¹⁾と比較的まれである。脂腺癌は放射線照射が誘因となるという説もあり、自験例も過去に子宮頸癌の放射線治療歴があったがこれらの因果関係については不明である。予後は眼瞼脂腺癌と同等かより良いといわれているが、1999年安齋ら²⁾の眼瞼外脂腺癌15例のまとめでは、2年間経過観察できたものの50%が遠隔転移を認めたと報告しており、自験例においても今後も慎重な経過観察が必要と考えている。

脂腺癌の病理組織学的診断は、四方田ら¹⁾は以下のように述べている。1) 腫瘍は主に真皮内に存在し、周辺に向かい浸潤増殖する。2) 腫瘍細胞は異型性を認め、細胞質が泡沫状を呈する細胞と未分化の細胞からなる。3) 柵状配列はないことが多く、嚢胞形成や管腔形成を認めることがある。4) その診断には組織学および電顕的検索に加え、免疫組織化学的検索も有用である。自験例はこれらのすべてを満たしていた。

鑑別疾患として Clear cell type の SCC や Malignant clear cell hidradenoma を挙げたが、H-E で脂腺分化を伴う細胞を認め、特殊染色でも脂肪染色が陽性であったことから鑑別した。生検時の標本では一見特徴のない clear cell が主体な腫瘍に見えるが、よくみると H-E 上でも核が細胞の中心にあり、泡沫状の明るい胞体をもつ脂腺細胞様細胞を認めることが自験例の診断への鍵であり、免疫染色によってこれが脂腺細胞であることを確認した。

文献

- 1) 四方田まり、他：西日皮膚 62(2)：199,2000
- 2) 安齋真一、近藤慈夫：日皮会誌 109(13)：2111,1999



Fig.4



Fig.5



Fig.6